

天文の年鑑データブック

天文のデータをまとめた本

季節の星空や日月食、流星群といった天体現象を知りたい時、また天体に関するちょっとしたデータを知りたい時、インターネットで調べる方が多いのではないのでしょうか。一方で、手元に置いた紙の本をパラパラめくって調べるという従来からの方法も非常に便利です。そんなニーズに応えた書物が、天文に関する年鑑類です。

科学全般に関するデータが網羅された『理科年表』(国立天文台編集)は1925(大正14)年の創刊で、天体や暦に関するデータが掲載されています。一方、天文分野に特化した年鑑類で最も古いものは、1927(昭和2)年

に創刊された天文同好会編集の『天文年鑑』と思われます。編集を行った「天文同好会」は京都帝国大学の山本一清が中心となって1920(大正9)年に結成した日本最初のアマチュア同好会で、幅広い活動を展開し天文ファンからハイアマチュアまで多くの人を惹きつけていました。現在も東亜天文学会という名称で活発な活動を続けています。会では情報発信にも力を入れ、会誌『天界』を毎月発行し、身近な星空情報から天文学の最先端の動向まで、会員に情報発信をしていましたが、『天文年鑑』は1928(昭和3)年版から新光社という出版社から刊行しています。

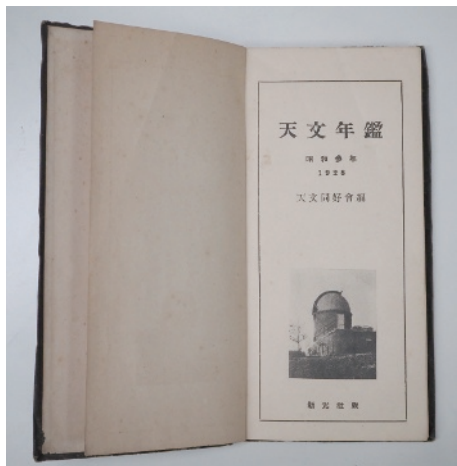


写真1:『天文年鑑』1928年版

1928年版『天文年鑑』の内容

科学館には、1928年版があります(写真1)。ちょっとその中身を見てみましょう。冒頭には創刊の言葉があり、「天体も天文学も天文学者も所々の天文台も、皆、年々の進展を続けている。故に天文を知らんとする者は、誰でも、この生きた事実と接触を絶たないことが必要である。「天文年鑑」はこのような要求に応ぜんために生まれたものである」と発刊の目的を述べています。さらにページをめくってみると、現在の年鑑類と同じように、太陽や月、惑星の天球上の位置、日月食や星食、木星のガリレオ衛星の位置と食現象の予報、変光星、流星群などのデータが掲載されています。

加えて、季節の星座紹介(写真2)をはじめ、主な星雲星団、二重星、銀河などの一覧表もあり、天体観測の計画を立てる際などには便利です。また、それぞれの天体や現象に関する基本的な情報も掲載されていますから、読み物としても楽しむことができます。この点については、冒頭の創刊の言葉で「中に各種の図表や解説を加えた意味は、一般の天文愛好家の必携書として、その座右を賑わし、天界への案内、理解の基礎、知識の標準、話題の論拠、研究の素材と便宜を供給せんためである」と説明されています。90年以上も前の年鑑ですが、その内容は、日頃から年鑑類を使用している現代の人にも違和感が少ないように思えます。



写真2:『天文年鑑』1928年版の一部

いろいろな天文の年鑑類



写真3:年鑑類いろいろ。左が1972年版『天体観測年表』、右上が1937年版『理科年表』、右下が1957年版『天文年鑑』

天文同好会の『天文年鑑』は、その後も名称や編集体制や発行所を変えながら、1960年ころまで発行されていたようです。一方、現在誠文堂新光社から発行されている『天文年鑑』は、1949年版から刊行されています。

その後、1960年代には『天文観測年表』、1970年代には手帳形式の『天文手帳』が発刊し、現在ではその他にも多くの年鑑類が書店を賑わしています。科学館も、自主出版として『こよみハンドブック』を隔年で発行しています。

まだまだ紙媒体の年鑑類は、たくさん刊行されています。特に手帳類や小型サイズの本はカバンに入れて携帯できますし、パラパラとページをめくると関連情報まで広く知ることができるのも便利です。ぜひ一度紙媒体の年鑑類を手にとってみてはいかがでしょうか。

嘉数 次人(科学館学芸員)